

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：22401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24660045

研究課題名(和文) 中国における脳卒中高齢患者の退院後継続看護プログラムの開発と有用性の検討

研究課題名(英文) Developing a program of discharge instructions for Chinese elderly patients with stroke

研究代表者

張 平平 (ZHANG, Pingping)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：90436345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本の知見を活かして中国における脳卒中高齢患者の退院後継続看護プログラムを開発することであった。日中両国の継続看護に関する文献研究及び中国での実態調査を通して、16項目の「退院指導アセスメント内容」と11項目の「継続看護につながる退院支援方法」からなる継続看護プログラムを考案した。さらに作成したプログラムを用いて中国某総合病院の4つの内科系病棟に勤務する82名の看護師への調査を実施した結果、プログラムの内的整合性と構成概念妥当性が検証され有用性が伺えた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop a program of discharge instructions for Chinese elderly stroke patients using Japanese knowledge in gerontological nursing. Through the literature review both in Chinese and Japanese articles, and field survey in China, the program was developed including the 16 items about discharge instructions assessment and the 11 items about discharge support methodology. The developed program was examined its reliability and validity among 82 nurses in four inner medicine of a hospital in China. As results, Cronbach's alpha was 0.899. A factorial analysis indicated that the program had appropriate construct validity.

研究分野：老年看護学

キーワード：脳卒中高齢患者 継続看護 プログラム開発 退院支援

1. 研究開始当初の背景

(1)「2011 天坛国際脳血管病シンポジウム」が開催され、中国脳卒中患者の状況及び今後の対応が紹介された。発病率が 9%と上昇する中、死亡原因の二位と障害原因の一位となる脳卒中は、個人や家庭並びに社会全体に重い負担と強い打撃をもたらしている。そのため、脳卒中の予防と治療が急務となり、予防と治療のための国家的組織づくりにおいては、これからの 2~3 年間に全国で 200~300 所の地域医療基地を、3~5 年間に市レベル以上の影響力のある病院に脳卒中予防基地を設けるというスローガンが打ち出された。なお、疾病予防より治療を中心とする中国では、高齢患者への退院指導の少なさと支援の貧しさ、更には急性期病院と地域医療施設との組織的な連携が不足するとの指摘があり、脳卒中予防の重要性と脳卒中高齢患者の治療後の機能回復に向けてのフォローの必要性が強調されており、本研究の意義は大きい。

(2)日本は医療保険制度や介護保険制度の取り組みとして脳卒中高齢患者がスムーズに在宅療養生活に移行できる継続看護が求められている。脳卒中を含む高齢患者への他職種との連携・協働による入院から地域や在宅までの一貫した看護ケアの提供においても多くの知見が蓄積されている。更に研究代表者本人は十数年間日本での老年看護を勉強し中国老年看護の発展のための先達として、日本老年看護の国際発信の重要性を認識しているため、本研究に取り組んだ。

2. 研究目的

本研究の目的は、日本老年看護学の叡智の国際発信を通して、中国の国情に合った脳卒中高齢患者の退院後の継続看護プログラムを開発し、中国のこれからの国際としての脳卒中予防に関する地域医療推進の方策づくりに貢献できる政策提言を図ることである。す

なわち、中国の急性期病院における脳卒中高齢患者の退院にむけた継続看護のニーズや課題を明らかにし、既に世界初の超高齢社会に突入した日本の、この分野で蓄積された多くの継続看護をはじめとする老年看護の知見を集積し、その国際発信を図り、中国の脳卒中高齢患者の QOL 維持と向上に寄与できる看護プログラムを開発し、そのプログラムの有用性の検討により、中国への政策提言を行う。

3. 研究の方法

(1)平成 24 年度には、脳卒中高齢患者の継続看護に関する状況を把握するために研究計画の倫理審査後、日本と中国における脳卒中高齢患者の退院指導および退院支援に関する先行文献の検討を行った。先行文献については、日本では、医学中央雑誌 Web ver.5 により、「脳卒中高齢者」「退院指導」または「退院支援」というキーワードを用いて、最新 5 年分の原著論文を検索し、分析対象とした。中国では、中国知識基礎設施工程網(CNKI データベース)により、「脳卒中」「老年人」「延续护理」というキーワードを用いて最新 5 年分の原著論文を検索し分析対象とした。得られた文献の「主な内容」「文献に用いられた研究方法」「筆頭著者所属」「刊行年」については、文献ごとに分類・整理した。

(2)平成 25 年度には、中国脳卒中高齢患者の継続看護に関する実態を把握するために中国 A 市 a 総合病院神経内科病棟看護師 5 名への個別インタビューおよび、中国 B 市にある 6 つの総合病院神経内科病棟看護師長 6 名へのグループインタビューを行った。インタビューの内容は対象者の同意を得て、IC レコーダーに録音し逐語録を起こした。データは質的研究法により分析した。また、先行文献の検討結果および実態調査の結果をもとに両国研究者は討議を行い、日本の知見を活かした中国の実情にあった脳卒中高齢患者の退

院後継続看護プログラムを考案した。

(3) 平成 26 年度には、考案したプログラムの有用性を検証するために中国 C 市 c 総合病院の 4 つの内科系病棟の看護師を対象にプログラム内容の重要性に関するアンケート調査を実施した。データは IBM SPSS Statistics version 21 を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 先行文献の検討結果

日本側先行文献の概要：過去 5 年間の 18 件のうち、2008 年に刊行された文献が 8 件であり、最も多かった。14 名の筆頭著者（77.80%）は病院に勤務し、4 名の筆頭著者はリハビリテーションセンター、脳卒中センター、市役所と看護系大学に 1 名ずつ勤務する状況であった。先行文献の主な内容として 9 件（50%）の文献では、利き手に麻痺が生じた高齢女性へのインシュリン自己注射方法の指導や、在宅に向けての内服行動の習慣化に着目した服薬指導などを含めた患者の個別性を尊重した、患者のニーズに合った退院指導の具体的な関わりについて記述された。6 件（33.3%）の文献では、クリティカル・パスやコミュニケーションノートなどのツールを用いた看護師を含む多職種連携による退院支援の効果について論述された。3 件（16.7%）の文献では、退院した患者または再入院した患者の当初入院中に受けた退院指導に関する満足度の調査結果及び問題点や改善点について提示された。以上の分析により、脳卒中高齢患者の個別性を尊重した、多職種との有機的連携による退院指導が行われている現状が伺われた。

中国側先行文献の概要：32 件の中に 2013 年に刊行されたものが最も多く 60% 占めた。筆頭著者は臨床看護職者と看護教育者が多かった。先行文献の主な内容としては、健康指導やリハビリテーション指導、服薬管理、カテーテルの管理、褥瘡の予防方法などに

する継続看護のニーズが述べられていた。また、病院治療が中心であること、病院と地域との連携が図れるシステムがないこと、地域看護ケアを提供する人材がないことなどの継続看護を推進する面での問題や課題が提示されていた。さらに外国の知見を活かして、多職種連携の促進及び退院調整が機能できるように継続看護につながる医療システムの構築が必要であることも記述されていた。

(2) 看護職者への調査結果

看護師への調査結果：対象者 5 名は全員女性であり、平均年齢は 35 歳であった。神経内科病棟での平均勤務年数は 13 年であった。主な内容としては、退院支援において、退院指導を行うことがメインであった。退院支援の困難として 3 点挙げられた。一つ目は人手不足や専門知識が乏しいなどの看護師自身のことであった。二つ目は高齢者の理解力が低下することや学歴が低いことなどの患者側のことであった。三つ目は病院と地域と患者や家族との連携や連絡がないため、退院後の患者の状況を把握できないなどの病院側のことであった。また、退院支援を促進するための期待として、病院と地域の有機的連携を強化すること、地域医療ケアを充実させること、患者の個別性にあった退院支援が継続できることが挙げられていた。

看護師長への調査結果：対象者 6 名は全員女性であり、平均年齢は 45.33 歳であった。神経内科病棟での平均勤務年数は 23.83 年であった。主な内容としては【退院支援の現状】、【退院支援の問題点】、【退院支援への提案】の 3 つのテーマに集約できた。

・【退院支援の現状】では、カテーテルの管理、リハビリテーション、食事指導、服薬指導、疾病知識の提供などの退院指導の内容が多いこと、講座での集団指導、個別指導、電話相談、テレビ会話、外来での指導、家庭訪問などの支援形式が多様であること、支援チームが看護師、理学療法士、医師などの多職種からなっていること、支援の形式は多様で

あるが、現段階では退院指導が主となり、退院後の継続支援が乏しいこと、が挙げられていた。

・【退院支援の問題点】では、疾病リスクの大きさと看護の難しさにより、退院支援における看護師の総合的な看護能力が及ばないこと、配置の少なさと離職の高さで、退院支援を十分に行うための看護師人員確保が困難であること、病院ごとの退院支援の内容が異なるため、統一した退院支援に関する指導方針がないこと、家庭訪問を行う際のリスク防止、訪問費用の不明確などで、退院後のフォローに関する保障体制と制度が整っていないことが挙げられていた。

・【退院支援への提案】では、病棟看護師を増やし、退院支援に関する部署を作ること、看護師への研修を十分に行い、退院支援における総合的な看護能力を高めること、情報の管理と共有、多職種連携、費用の明瞭さなどの面から退院支援サービスの一貫性と継続性を強化することが挙げられていた。

以上のように中国では、脳卒中高齢患者への退院支援は全ての病院で行い始めているが、全体的には一時的な疾患管理の退院指導が中心となり、退院後の生活支援が少ない状況に置かれていることが示された。また、退院支援における看護師の人員不足と能力不足がある上に、退院支援に必要となる看護サービスを提供する際の組織もないため、継続看護を含めた退院支援に関するシステムづくりが必要であるといえる。

(3)病棟看護師へのアンケート調査結果

以上のように先行文献の検討結果及び、看護師並びに看護師長へのインタビュー結果をもとに 16 項目の「退院指導アセスメント内容」と 11 項目の「継続看護につながる退院支援方法」からなる脳卒中高齢患者の退院後継続看護プログラムを考案した。作成したプログラムを用いて、中国 C 市 C 総合病院の 4 つの内科系病棟で 82 名の看護師にプログラム内容の重要性に関するアンケート調査を

実施した。対象者のうち、女性が 81 名、男性が 1 名であった。平均年齢は 30.70 歳であった。学歴は大卒が 40 名で、49.4%占めていた。当該病棟での勤務年数は平均 6.49 年であった。また、27 項目の内容から「退院指導方法の工夫」「患者の生活状況の把握」「患者の健康行動変容に対する認識の確認」「同職種間連携の強化」「患者と家族への社会資源に関する情報提供」「患者への退院後注意事項の告知」「入院時からの退院指導の実施」との 7 因子が抽出された。そして、信頼性統計量としての係数が 0.899 であった。これらの結果より、本プログラムの有用性が伺えたため、今後、プログラムによる介入を行い、脳卒中高齢患者の退院支援に関する効果を探索していく。なお、脳卒中高齢患者の在宅療養支援に関する研究も加え、入院から地域や在宅までの一貫した長期ケアが円滑に提供できるような政策提言を行っていく。本研究では、国際シンポジウムでの招聘講演が 1 件、国際学会での発表が 4 件、中国雑誌での論文掲載が 1 件、国内学会での発表が 1 件、との研究成果があった。世界の中で単独に超高齢社会に立った日本で作り上げられた老年看護学領域の成果、とりわけ、地域包括ケアシステムづくりが盛んに取り組まれている中での長期ケアや継続看護に関する英知の国際発信が図られた。

<引用文献>

2011 天坛国际脑血管大会、
<http://bj.39.net/bjzt/jdzgnzzfzzl/>、
北京、2011

王娟、老年护理需求与护理教育改革的思考、管理实践、10 卷、196 期、2008、213
美ノ谷新子、佐藤裕子、宮近郁子、他、脳卒中退院患者からみた在宅療養生活開始時の現状と課題、順天堂医学、54 号、2008、73-81

川口淳美、在宅療養開始後における退院支援の評価と退院支援内容に関する研究、日本保健科学学会誌、12 号、2009、16

張平平、正木治恵、中国老年看護の発展に向けた一考察 日本老年看護の概観を通して一、文化看護学会誌、2 巻、1 号、2010、40-47

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

郭晓东、万巧琴、張平平、日本医院护理岗位管理现状介、护理管理杂志、査読あり、Vol.14、No.9、2014、623-625

http://epub.cnki.net/kns/brief/default_result.aspx

張平平、万巧琴、大塚真理子、日本老年护理领域中延续护理的发展及现状、中国护理管理、査読あり、Vol.13、No.10、2013、42-44

http://epub.cnki.net/kns/brief/default_result.aspx

〔学会発表〕(計 5 件)

Pingping Zhang、Establishment of a transitional care program for discharged elderly stroke patients、18th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)、2015 年 2 月 5 日、台北市 (Taiwan)

張平平、大塚真理子、尚少梅、他、脳卒中老年病人延续护理现状调查结果分析、中华护理学会第 17 届全国老年护理学术交流会议、2014 年 8 月 21 日、赤峰賓館 (中国内蒙古自治区赤峰市)

刘丽萍、張平平、对脑卒中老年病人延续护理文献的分析、中华护理学会第 17 届全国老年护理学术交流会议、2014 年 8 月 21 日、赤峰賓館 (中国内蒙古自治区赤峰市)

張平平、大塚真理子、万巧琴、他、脳卒中高齢患者の退院指導における現状と課題 北京市内 6 病院の神経内科病棟看護師長へのインタビューから一、日本老年看護学会第 19 回学術集会、2014 年 6 月 28 日、愛知県産業労働センター (愛知県名古屋市)

Zhang Pingping、Otsuka Mariko、Zensho Mariko、etc、Current situation of

discharge instructions for elderly stroke patients receiving nursing care –A review of the Japanese literature-、20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics 2013、2013 年 6 月 25 日、Seoul、(Korea)

〔シンポジウム招聘講演〕

Mariko Otsuka、Pingping Zhang、Japanese nursing service mode、The 2nd China International Senior Services Expo-Symposium on Rehabilitation and Nursing Service for the elderly、May 2nd、2013、China National Convention Center

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

張 平平 (ZHANG, Pingping)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：90436345

(2) 研究分担者

大塚 真理子 (OTSUKA, Mariko)
千葉大学・看護学研究科・特任教授
研究者番号：90168998

(3) 連携研究者

正木治恵 (MASAKI, Harue)
千葉大学・看護学研究科・教授
研究者番号：90190339

連携研究者

金川克子 (KANAGAWA, Katsuko)
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号：10019565

(4) 研究協力者

尚 少梅 (SHANG, Shaomei)
北京大学・看護学院・教授

研究協力者

万 巧琴 (WAN, Qiaoqin)
北京大学・看護学院・准教授

研究協力者

康 風英 (KANG, Fenyong)
山西医科大学附属第一医院・准教授

研究協力者

楊 輝 (YANG, Hui)
山西医科大学附属第一医院・教授